

死体を取り調べたところ、焼火箸で刺し殺され、小松沢の奥でだれとも面相の判らないように、一面の皮を剥ぎ、隣の沢に棄てたのだらうということになった。

その後、一方の沢を面剥沢といい、棄てた沢を死人沢と呼ぶようになったといわれる。

死人片付けの当番の中に一夜の宿を貸した百姓も入っており、また、おれの手にかかるかと思わずつぶやいた。これを聞いた村人たちは、責めるにおちず、語るにおちたと、諺の通りであったことを語り伝えている。

(話者 柏村英一)

杣道内の由来

《長沼》

杣道内は長沼豊町の西、北古館の北の方にある地名だが、昔、北古館の殿様が江花の大和山定満寺を、館の北東の地に移して江光院と号して城の守りとした。

殿様は寺の方丈を招いて、「貴僧の目の届く限りの土地を寄附する」といった。館より寺まで目の届く限りの土地が寺の領となった。

この地を目通りと呼んでいたが、いつしか時が変り、目通りの字を、「もくどう」と読むようになった。今は杣道内という字を当てている。

(「長沼名義考」より)